

題目：顔画像再認課題を用いた裏切り者検知の研究

氏名：下間 恵梨

指導教官：山岸 俊男 教授

人間が社会的環境の中で生き延びていくためには、他者と協力し合うことが重要である。多くの人々と日々相互作用を繰り返す中で、非協力的な相手を避けて騙されないようにしながら、協力的な相手との関係を維持していくためには、相手の顔を記憶しておくことが必要だと考えられる。特に、裏切り者の顔を記憶しておくことで、搾取される危険を回避するだけでなく、場合によっては仕返しをすることも可能になる。

そこで、協力者の顔と非協力者の顔で覚えられやすさが異なるかどうかを検討するため、四人のジレンマゲーム（PD）の行動の情報（協力・非協力）を持つ顔写真を用いた再認課題を実施した。先行研究では、刺激写真に付与された PD 行動の情報が架空のものであったため、写真の人物が表出する本当の協力傾向の手がかりが考慮されていなかった。本研究では先行研究と異なり、実際の PD 行動の情報を持つ顔写真を用い、参加者にはその情報を教示せずに再認実験を実施した。この実験によって、人間が顔から得られる何らかの裏切りの手がかりを無意識のうちに見抜き、非協力者を選択的に記憶する可能性について検討した。

実験では、参加者に顔写真を記憶させた後、参加者が記憶したものと同じ顔の他に、初めて提示される顔の写真を加えて再認させた。裏切りの手がかりが表出されやすいのはどのような場合かを調べるため、実験には撮影条件の異なる 2 種類の写真を用いた。顔写真のうち、「PD 行動を決定した瞬間」の写真は、「協力（または非協力）傾向を持つ人の、協力（または非協力）をとったときの態度」、「PD 終了後」の写真は写真の人物の「一般的な協力傾向」をそれぞれ表しているとみなした。

実験の結果、非協力者の顔は協力者の顔よりも再認率が高いことが示された。この傾向は、「PD 行動を決定した瞬間」の顔写真において有意であり、「PD 終了後」の顔写真では有意ではなかった。さらに、再認率は外見的魅力度とは関係していなかった。

以上の結果から、顔には裏切りを示す何らかの手がかりがあり、人間はそれを無意識のうちに見出し、記憶しておく能力を備えている可能性が示唆される。またこの手がかりは、裏切りの態度を示した瞬間により明白に表れる。今後は、刺激写真を増やしての追試、および顔が示すどのような手がかりが再認に関係しているかについての探索研究が望まれる。